



タイの上座部仏教僧侶で非暴力運動指導者として知られるプラ・パイサン・ウィサーロー師(第一次APIフェロー)をスピーカーに迎えた“Spirituality in the Age of Extremes: How Can the Public Face the Challenge?”と題したセミナーにて(左が筆者)

刺激的なことであった。また、組織が民間であったため、政治から独立して運営されていたのでバランスを大切にし質の高い仕事を追求できる、リベラルで恵まれた環境だった。

アジアの国際交流は驚くほど限られている

現在私は、タイ国チュラロンコン大学

に勤務し、Asian Public Intellectuals Fellows Programのタイ国プログラム・コーディネータを務めている。グローバル化の進む今日、社会問題は一国で解決することはできない。世界各国は相互依存関係を深めている。しかし、アジアは植民地時代の経験等の影響で隣国同士の交流が驚くほど限られており、多くの文化遺産を共有しているにもかかわらず、互いをよく知らない。同フェローシップはこのような状況を踏まえ、学者だけでなく社会運動に関わりをもつさまざまな背景の人々に、独自の研究プロジェクトを通じてアジアの他国の事情を学ぶ機会を与え、志を同じくする人々との連帯を高め、地域全体の社会向上に貢献できる人材のプールを大きくしようという国際プログラムである。

私の職務はフェローシップ事業に関わる全てのサポートである。フェローらの研究内容に関するアドバイスもある程度しなければならぬ。彼ら一人一人の話を聞き、関心部分を引き出すことがポイントとなるが、これはUWC時代に学んだ、多様な価値観があるという前提でsensitivityを大切にしようとする姿勢なしにはできない。十代の頃からいろいろな言語背景の人々と付き合ってきた経験は、どんな癖のある英語を話す人、あるいは英語力が弱い人とのコ

ミュニケーションにおいても、先方の言わんとすることを不思議とうまく想像することも可能にしている。これも、私の今の仕事に大いに役立つ。コーディネータの仕事は裏方に徹することであり、短期的な視野で目に見える結果を出すことは難しい。しかし、遅々たる歩みでも、微々たる力でも、何らかのかたちで、社会に役立つ手助けをしたい、そのような志を育んでくれたのも、UWCだと思う。

国際理解を担う方向に収斂

タイ人ジャーナリストを伴侶に選り当地に住むことになった私だが、元は日本の農村育ちであり、このような人生を送るとは想像しえなかった。多感な十代に、自分の枠を超えざるをえないUWCでの経験が基盤となり、国際公益活動や魅力あるさまざまな人たちと出会い、ものごとが一つの方向に収斂されてきたのだと思うこの頃である。

異なる経験と価値観を尊重し、共存していく道を探ることなしに国際理解に近づくことはできない。このことを心にとめながら、少しでも国際理解の一助を担えるよう、また、UWCで与えていただいた貴重な経験を私なりに社会還元できるよう、努力を重ねていきたいと思う。

国際理解の一助となるために

茗溪学園を経て、一九八三―八五年UWCアトランティック・カレッジ留学。上智大学外国語学部卒業後、九一年―九八年(財)国際文化会館企画部勤務。九八年よりタイ国在住。現在Asian Public Intellectuals Fellowships Program タイ国プログラム・コーディネーターとして、チュラロンコーン大学アジア研究所に勤務。

タイ・チュラロンコーン大学
アジア研究所

吉田美智子
よしだ みちこ

私の基盤と sensitivity

「International understanding, really, is 'peoples' understanding, isn't it? (国際理解ってというのは、結局「ひと」を理解するということでしょうか?)」。国際理解は、異なった価値観をもつ一人一人を理解し尊重することに他ならない。寮友のこの言葉はそういうことを私に気づかせた一言であった。

私がアトランティック・カレッジに留学させていただいた一九八〇年代の前半は、ヨーロッパはまだ冷戦下であり、今日とはだいぶ様子が違っていた。各国から選抜、派遣された学生は、皆、何かミッションを感じ、理想に燃えてUWCという国際運動(movement)に加わるべく参集している雰囲気があり、国際理解とは何か、世界平和とはどうあるべきかなど、漠然としたテーマを議論することも日常の風景であった。

当時は英語力もひどく未熟で、何が起きているのかわからない場面も多かったが、多様な経験を通じて何かを感じ取り、自分の頭で考え、判断し、行動する、という訓練を日々受けていた。

そのような厳しくとも充実した毎日だったが、自分でも分析しきれないフラストレーションが溜まっていた。ほとんどの学生がヨーロッパ以外の文化や価値観に対して無知かつ鈍感なことに、幻滅を覚え始めていたのだ。カレッジの地理的な条件もあり、何を議論するにも相手の文化的土壌(ヨーロッパの文脈)に立つことを前提にしていた。また相手のことばの運用能力で議論ができなければ何も始まらないこと。それらは、国際理解という理想の一面と国際交流という実^は際が孕む矛盾ではないかと考えるようになった。

UWCでの経験は、シヨック療法のよう

●(社)ユニテッド・ワールド・カレッジ(UWC)日本協会は、世界各国から派遣されてくる生徒たちとの教育体験の共有により、国際感覚豊かな人材を養成するという理念を掲げるUWCの日本委員会として、毎年一〇名以上の高校二年生を世界各地にあるUWC傘下の高校に派遣し、すでに三七六名の卒業生を輩出している。

だった。特殊な状況で自己を見つめ、アイデンティティを模索する。さらに異文化の文脈のなかでどう考えていくかを検討する。私が一番強く感じたのは、あらゆる人や文化やものごとに対するsensitivityの重要性であり、その感覚を磨くことの大切さであった。これが「国際理解・国際交流」の限界と矛盾を誠実に乗り越えるための、私の態度の基盤となっていた。

日本に戻り大学を卒業するころになると、私は、異文化交流・国際公益活動の中で経験を積める仕事をし、自分を磨いていきたいと思いはじめた。そして幸運にも採用され七年余りを過ごした(財)国際文化会館(International House of Japan)では、私の仕事人としての基礎をつくっていた。 「国際交流は、ひとに始まり、ひとに終わる」。創設者である松本重治先生のこの言葉は、まさに私のUWC体験と直結していた。同会館が主として対象としてきたのは、国内外の一流の知識人であり、彼らの思考や人柄に触れる機会を与えられたことは、